

障がいがあっても 共に学ぶ学校

大阪市立中央図書館は数日遅れになるが、全国の地方紙を読むことができるので活用している。沖縄タイムスもその一つであり、定期的に辺野古問題など目を通してきた。最近、同紙の標題連載を図書館でコピーして切り抜いて読んだ。フェイスブック仲間の投稿で読んではいしたが、長い連載をコピーして読むと理解が深まる。

連載1回は1月22日の1面から始まる。「地域で学び 友と成長」と大きな見出しで、大阪市の重度知的障がいがある澤田健太さん(26)を伝える。満面の笑みを浮かべる写真が印象的だ。「普通学級で表現豊かに」と。

記事の最後に一大阪府は20年ほど前から、障がいの有無にかかわらず、入学を希望する生徒は公立の高校で受け入れている。一方、沖縄では、重度知的障がいのある生徒を県立の普通高校で受け入れることには消極的だ。重度知的障がい者の仲村伊織さん(17)=北中城村=が今春、3度目の県立高校入試に挑むのを前に、先進地・大阪の取り組みをレポートする。



1面に続いて27面にも、初の言葉「ありがとう」と大きな見出し。公立の普通高校に入ったことが人生の節目になった。「友だちの力はすごい。社会が広がり、急に大人になった」と母親の美枝さんはうれしそうに振り返る。「恋した先輩に、どうしても言葉で伝えなかったんだろう」と美枝さん。「人生で一番楽しく、成長する時期が高校や大学。だからこそ、障がい者が一般の生徒たちと共に学ぶ機会が広がってほしい」。障がい者が成長し、人生の思い出をつくる機会になると信じている。

24日の連載2回は、大阪市大正区にある府立高校。知的障がいを伴う自閉症の男子生徒(18)は、普通科3年のクラスに在籍している。クラスや学校にとって、彼は「特別な存在ではなく、一つの個性」。教頭は「勉強に意欲的で、学ぶ姿勢はほかの生徒にも影響を与えている」と話す。24日3回は知的障がいのある山内寛さん(19)、「進級基準配慮で卒業」。25日4回は枚方市に住む新万智子さん(34)、「受験10年世論動かす」と。

26日5回は大阪府立西成高校の山田勝治校長と元教員の松森俊尚さん、27日6回は元北中城村教育長の川上辰雄さんへと続き、28日7回の熊本学園大・堀正嗣教授で連載は終わる。36年間勤めたベテランの小学校教員の松森さんは、障がい者を普通学校に来てもらう取り組みを大阪で進めてきた。「点数でしか評価しないと、子どもが本来持っている力を切り捨ててしまう」と警鐘を鳴らす。連載では大阪の取り組みが評価されているが、大阪は競争主義の教育など問題も多い。また松森さんにと話したいものだ。

(2020年2月13日)